

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

烙印の姫巫女DL7

RAKUIN NO HIMEMIKO

presented by
STUDIO WALTZ



淫敵退散

千年におよぶ鬼との戦い

淫らの地獄を阻止せんと

輝く羽衣をまとって戦う

美しい姉妹がいた

その名は天津亜衣
そして麻衣



お覚悟！

しかし、姉妹は敗れた。鬼獣淫界の責めは凄惨を極めた。

夜となく昼となく続く陵辱。ある時、姉妹は互いに向かい合う格好で犯された。

亜衣の目の前で、麻衣は後ろからの愛撫に身をくねらせていた。

はあん

んふ

あん

(……ダメよ、麻衣、キスなんて……)

鬼と麻衣、互いの舌がいやらしく動いている。

(ま、麻衣、自分から……そんな……)

(ああ、あんなに胸、もみくちやにされて……)

(痛くないの?)

時折、適度なタイミングで乳首に刺激が与えられ、

その度に麻衣の乳房が大きく揺れた。

(ううん、分かってる。……痛くない。……とても気持ちいいのね)

麻衣は耳元で何事かささやかれ、

やがておずおずと腰を動かし始めた。

初めて見る妹の腰の動き。

(なんてこと……、麻衣、そんな顔しないで、しちやダメよ)

(ああ、でも、きつと、私も……同じ顔をしている……)

麻衣の目の前で、亜衣は後ろから貫かれていた。

（お姉ちゃんが、あんな顔するなんて……）

鬼の大きな腰が亜衣の尻にぶつかる度に、亜衣の乳房が大きく弾んでいる。姉を突き上げるモノの大きさを思い浮かべ、麻衣は切なげに腰をくねらせた。

やがて歯を喰いしばって耐えていた亜衣にも少しずつ変化が現れた。

（お姉ちゃん……、声が……、出てるよ）

荒い息遣いの中に、甘い響きが混じっている。

男勝りと言われた姉の面影はすでになく、

そこにあるのは快楽を受け入れる一人の女の姿だった。

（……分かるよ）

麻衣も同じく後ろから犯されているのだ。不意に姉妹の視線が合った。

（……！）

見つめ合うこの羞恥をこらえ切れず、先に目を逸らせたのは亜衣の方だった。

（麻衣い……ああ……み……見ないで……私のこんな姿……お願い……）

愛しい妹の視線が快感を倍加させる。亜衣は絶頂への階段を駆け上がっていった。





鬼獣淫界に敗れて以降、さんざん罵られてきた麻衣。
それでも一つの淡い想いを胸に秘めていた。

もしも、将来、恋人ができたとして…。

どこもかしこも汚されてしまった自分だけけど、
それでも、どこか一ヶ所でも触手や鬼どもが
触れていない場所が残っていたとしたら…。

（ここは、あなただけだからね…）

と心の中で言いつて、そこを優しく触ったりしてもらおう…。

しかし、そんな想いを知ってか知らずか、

今、麻衣に絡みついている触手は実に丁寧で執拗だった。

本当につま先から毛先までを舐め上げる気なのか。

唇や乳首、クリは言うに及ばず、

足の指の間、へそ、耳のくぼみ、鼻の穴、

肛門のしわさえ一筋ずつ伸ばして舐めまわした。

恋人だけの場所など、もうどこにもないのだと思い知らされ、

被虐の姫巫女は全てを捨て淫らに屈するしかないのだと悟るのだった。

はあ
あ

あ
あ
ん

は
う
う

ン
ン
ン

ン
ン
ン

ン
ン
ン

ン
ン
ン



触手は亜衣の濡れそぼった花びらを割り開き、入り口の感触を楽しむように動いていた。

「く……この、……やめ……ろ！」

お尻の穴にも触手の頭が押し付けられ、グイグイと圧力をかけてくる。

「うっ……、うああ、はくううう」

だが双方とも小さな穴に侵入するための最後の一押しがない。

（……なに!?……どういつ!?……まっ……まさか!?）

ぎりぎりの攻防だと思っていた亜衣は目をむいた。

（じ……じ、焦らし……てるの!?）

いつもの亜衣なら、ふざけるな……と激怒していると「るだが、そうはならなかった。

「……私が!?……触手!?」

突きつけられた現実。

亜衣はびしょ濡れの股間を恥ずかしそうに

閉じようとしたが、上手くいかなかった。

かろうじて抵抗の心は残っている。

だが、身体はさらなる刺激を求めて

淫らなよだれを垂れ流していた。

今、亜衣の心を満たしているのは、

このまま昇りつめて無様なイキ顔を

晒してしまうのではないかという不安だった。

いやああああ

ひい

いやあ

ああ

グ
フュ

グ
フュ

〃
フ



いつしか亜衣は自ら鬼の巨体にしがみ付いていた。

(いやっ……恥ずかしい……こんな恰好……)

鬼は亜衣の身体を軽々とバウンドさせた。

ぶ厚い胸板に双乳が押し潰され、その先の乳首が擦り上げられる。

(ああ、なんて……力強い……)

身も心も委ねてしまうと、そこには素晴らしい快楽の世界が広がっていた。

膣にはたくましい巨根がねじ込まれている。

驚くべきことに、それによって亜衣の身体が支えられていた。

結合部からは本気の愛液が溢れ、すでに洪水状態だ。

《ああ、ああ、気持ちいい!……ぜ、全部、気持ちいい!》

内股も、二の腕も、頬も、触れる所全てが気持ちよかった。

いつ果てるとも知れぬ地獄の快楽。

これが女の悦びか、亜衣は分からないままに全身で受け止めた。

(ああ……わたし……このままじゃ、……イッ……ちやう……)

甘い喘ぎ声が止まらない。途切れるのは濃厚なキスの最中だけだ。

(……ホントに、……やだ、イ……イク……イッちやう……)

亜衣は無我夢中で腰を振り続けた。

ああん

それダメエ

はあん

も...もう

ダメエエエエ

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ



「……も……もう、……許し……て」

肩で息をしながら、麻衣は言った。

疲れ果て、わずかに身体を動かすことさえままならない。

何度もイカされ、身体は異常に敏感になっている。

膣からは中出しされた大量の精液が逆流して噴き出している。

その都度、屁のような音がした。

それがたまらなく恥ずかしいのだが、

今の麻衣にはどうすることもできなかった。

すでに数体の鬼どもが麻衣を犯さんと勃起をし「きながら
取り囲んでいる。

その足元では、邪鬼どもがはしゃいでいる。

「次はオレだ!」

「いや、オレだ!」

「オ、オラガ舐メテ、イカセテヤルダ!」

耳に入ってくる下品な声。

(……す、少し、……休ませ……て)

震える麻衣の願いは、どうやら聞き入れられそうになかった。

やがて大きな手が麻衣の尻を掴んだ。

グイと引き寄せられ、尻肉の間にいきり立った

肉棒があてがわれる。

花びらの柔らかな肉感を十分に

味わった後、亀頭がめり込んできた。

「あ……う……」

麻衣は力なく反応した。

(ああ……、そこは……、お……お尻は、……もう……イヤなの)





すでにホト魚によって梅の護符は取り除かれている。

亜衣の純潔を護るものは、もはや何もない。

愛液で濡れたアソコにカーマのペニスがあてがわれる。

亜衣は身をよじって、必死に拒むが……

ズブリッ！

亜衣の処女膜はカーマの肉棒によって貫かれた。

亜衣は猿轡を噛みしめて、声にならない悲鳴をあげた。

亀頭は聖なる柔肉の中を奥へ奥へと突き進んでゆく。

「はぁーっはっはーっ！ ついに！ 亜衣を犯してやったぞお！」

カーマは狂喜して腰を振りたくった。

大きく割り開かれた足を閉じることでもできず、

亜衣は耐えるしかなかった。

生まれて初めて膣が押し広げられる感覚。

下腹部の強烈な異物感に亜衣は顔をしかめた。

「くくく！ 分かるか？ お前のホトの奥まで届いている魔羅の感覚が？」

魔羅を意識させるべくカーマはゆっくりと膣をかき回した。

「ふぐっつっつー！」

初々しい亜衣の膣肉がカーマの肉棒を締めつける。

「おおお！ 素晴らしい！ いい締めつけだぞ！ 亜衣！」

亜衣の目には大粒の涙が光る。

「よほどこの魔羅が気に入ったとみえる！」

亜衣の意志に反してさらに愛液が分泌され、いやらしい水音が響く。

「よおーく覚えておくがいい！ お前を女にしたこの魔羅の感触をな！」





最初はきつかった小さな穴だが、徐々に固さがほぐれ、
今やスムーズにピストンを受け入れている。

もちろん亜衣には分からないことだが、亜衣の膣肉は
カーマの魔羅を程よく締めつけ、極上の快楽をもたらしていた。
淫邪王たるカーマでさえ、その具合に酔いしれた。

（何と、これ程とは……）

カーマは亜衣の名器ぶりに舌を巻きつつ、膣内の隅々まで
丁寧に魔羅をこすり付けた。

心地よい射精感が込み上げてくる。

「よおーしー亜衣よー！ たっぷりとお中に出してやるぞー！」
「!?」

亜衣はその言葉に驚き、懸命にもがいた。

しかしカーマの腰振りのピッチは上がってゆく。

「イヤーイヤー！ 絶対にー！ それだけはー！」

カーマ絶頂の瞬間が近づいている。

「おっーおっー出るぞー出るぞー出るぞー！ おおおおっー！」
「イヤーイヤァー！」

亜衣の性感もどうしようもないほどに高められている。
特に膣は射精を促すかのように収縮を繰り返した。

（あ……も……う、ダ……メ……）

亜衣の抵抗がピークを超えたところで、

二人は息を合わせたかのように同時に絶頂を迎えた。



んんっ！

んん

ぐん

ズン

ふう

ズン

ズン

ぐんぐんぐん！

「おおおおお〜!」

カーマは吠えた。

そして、ありったけの精を亜衣の奥深くに放出した。

ビュルルル〜ビュル!

大量の精液は膣を満たし、逆流して外に噴き出した。

「ふふふ、ハアーツハツハー!」

震える亜衣を見下ろしながら、カーマは極上の快楽を味わっている。

《出されたー中にー!》

信じがたい事実だった。

《犯されて、…な、中で出されるなんて!》

悔し涙があふれる。

激しいピストン運動から解放され、亜衣もようやく息を整えることができた。

周囲からは男嫌いと言われてた亜衣だが、

年相応に初めては好きな男性とは思わないでもなかった。

《…こんな形でなんて…ひどい》

初めて知るペニスの感覚。そして精液の感覚。

《あ…、まだオ○ンチンがビクビクしてる…》

下腹部に大きくて熱いものが入っているのが分かる。

《…これが、…オトコ。これが、セックス…》

自分に覆いかぶさっているカーマの息遣いが聞こえる。

ふと危険日であったことを思い出したが、どうしようもなかった。

巫女として、女として汚れてしまった自分。

これ以上ない絶望の中であつたが、泣き濡れてばかりはいられなかった。

《ま…麻衣だけは、麻衣だけは守らないと…》

しかし、亜衣の決意をあざ笑うかのよう、

カーマの魔羅がゆっくりと動き始めた。

「うああ…」

淫邪王のセックスの地獄はこれからだった。

次に亜衣の前に現れたのは、2体の半魚人だった。
オス・メスともに股間に大きな生殖器官を持っていた。

繋がれた亜衣にモンスターの生殖本能から逃れる術はなかった。

まずメスがペニス状の産卵管を亜衣の膣に挿入した。
子宮一杯に無数のビー玉大の卵が産み付けられる。

亜衣は悶絶した。

息も絶え絶えの亜衣に今度はオスが覆いかぶさった。

産卵管よりも一回り大きい射精管を挿入。

激しく腰を振り立て、大量の精液を放出した。

子宮内の卵がどつぷりと精液につかるまで射精は続いた。

おぞましい人外の交尾に、亜衣は潮を噴いて絶頂、失神した。

交尾から十日が過ぎた。

受精卵は胎内で十分に育ち、亜衣の腹は妊婦のように膨らんでいた。
卵を産み落とさねばならない時期が近づいてきている。

仔を宿し、我が身が変化してゆく違和感。

小さな命の母になる喜び。

この世に異形のモンスターをひり出す絶望。

様々な感情にさいなまれ、亜衣はもはや狂うしかなかった。





姉妹のソープ奉仕

ああ

あは

ふあ

天神学園の生徒たちを人質に取られた姉妹は一般入への奉仕を強いられている。鬼獣淫界の鬼どもに金銭に対する執着はない。男どもは群がった。

ただ同然で天津の姉妹の淫靡な奉仕を受けることができる。その気になれば必ずなるが本番まで許されるというのだから。姉妹は男どもの様々な要求にすべて応え、そして犯された。

その後、姉妹は神泉においてその身体を清め、天津家の巫女として神事を執り行う。無論、そこでも恥辱の宴が待っているのだった。

新たな男が亜衣に覆いかぶさってきた。

（もっ…何人目？）

すでに亜衣は多くの男たちに精液を注ぎ込まれている。

新たな男はすぐには挿入せず、自分のペニスを亜衣の

花びらに擦りつけて、その柔らかな感触を楽しんでいた。

「あ…、うう…はああ…」

もはや拒む体力もなく、逆に甘い吐息が漏れてしまう。

この集団陵辱行為を拒めば、男たちの欲望の矛先は天神

学園の他の生徒たちに向けられてしまう。

それだけは避けねばならなかった。

耐えなければならぬ。

耐えるどころか、男たちを満足させねばならなかった。

「亜衣は今日からオレの奴隷だよ」

普段なら天地がひっくり返ってもあり得ない言葉だったが、

入れられながらでは亜衣の答えも曖昧にならざるを得ない。

「そんな…ひどい…奴隷なんて…いや」

深突きの間際にそれだけ言っのが精一杯だった。

うう

はああ



男はピストンのピッチを上げ、何度も同じ言葉を口にした。
「ホラー！なるんだよ！亜衣！奴隷に！」

たくみに強弱をつけた腰使いが亜衣の女心を蕩けさせる。
たちまち亜衣の吐息が濃密な色香を帯びてゆく。

「い、いやあ！ああ、はああっ！……ど、奴隷、いやあ！」

しかし、悲しいかな、亜衣の身体は反応する。

そして反応すればするほど、男の責めは的確になった。

「うああ、……あああん！」

ついに亜衣は押し切られてしまう。

「ああ！……なります！亜衣は……奴隷に……なりますからあ！」

「だから……」

涙目で訴える亜衣に、男も動きを緩め、満足げな笑みを浮かべた。

亜衣にももうこれがプレイなのか本気なのかよく分からない。

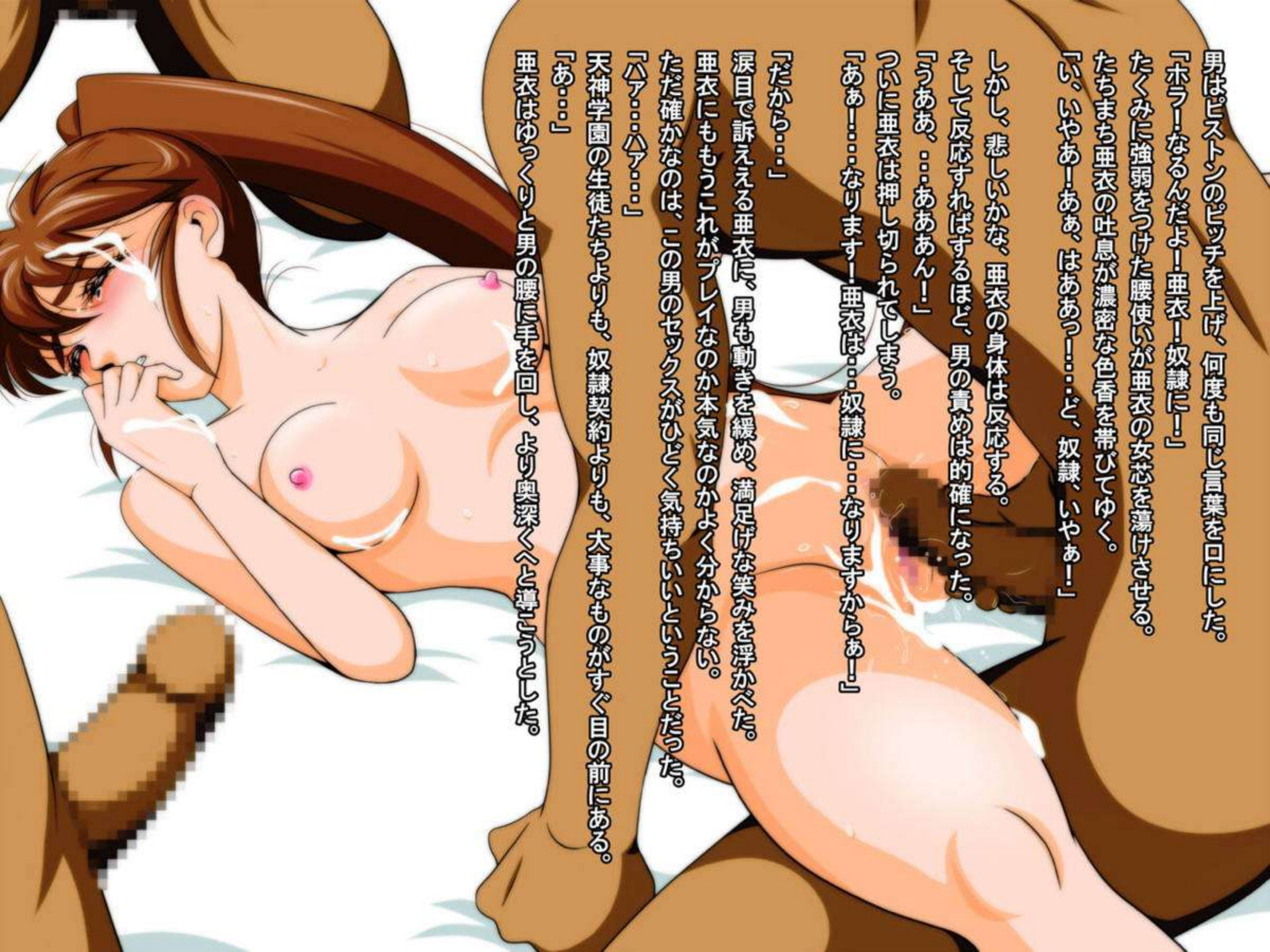
ただ確かなのは、「この男のセックスがひどく気持ちいいということ」だった。

「ハア……ハア……」

天神学園の生徒たちよりも、奴隷契約よりも、大事なものがすぐ目の前にある。

「あ……」

亜衣はゆっくりと男の腰に手を回し、より奥深くへと導こうとした。



うわあああ

ああ

（しまった！）

淫界の生物、巨大ミミズの回から無数の触手が放たれた。

触手はすばやく麻衣の身体に絡みつぎ、あっという間に麻衣の自由を奪ってしまった。

「くっ！放せ！」

圧倒的な力で引き寄せられてゆく麻衣。

モンスターの口は麻衣を二飲みにできるほどに大きい。

（く、喰われる！）

文明に守られた人間が忘れて久しい感覚だった。

巨大ミミズは獲物を高々と持ち上げ、口を大きく開いた。

麻衣の下で大きな回が割り開かれる。
麻衣は全力で抵抗した。
しかし、全く効果はなく、巨大な回の中に引き込まれていった。

やあ

あああああ！





麻衣は食道自体の嚥下運動と触手の補助的な動きで
奥へ奥へと逆さまに飲み込まれていった。

「うわあああ！」

何かの体液で溺れ死ぬか、肉壁に潰されて死ぬか。

気が狂うレベルの絶望だった。

ぬるつく粘液が麻衣の全身をどっぴりと濡らしていた。

所々、羽衣の神衣が溶け始めている。

粘液は消化液であり、かつさらに強力な媚薬（麻薬を
はるかに超える効果がある）だった。

麻衣がこの状況である程度の正気を保っていられるの
が何よりの証しだ。

その成分は皮膚からでも容易に体内に入り、あらゆる
感覚を麻痺させる。

そして性的感覚のみを劇的に亢進させるのだ。

一説には感度が三千倍にもなるとも言われていた。



ふあああ♡

ひい♡

その粘液にまみれ、麻衣の乳首はビンビンに勃起していた。

(な…何…なの?…これ?…はう…ひい!)

狭い肉洞の中をずり下がる度に飛び上がる程のほどの快感が麻衣を襲った。もはや声にもならず、身動きも出来ないまま、麻衣は悶え狂った。

ゆっくりと奈落にぬめり落ちてゆく麻衣。

「ひああ…はあん…」

この絶望的な状況で麻衣の頭には恐怖もなく、苦痛もなかった。

ただ全身の肌が肉壁に触れる感触だけでビクビクと痙攣し、潮を噴いた。

死を厭わない(あまり考えていない)攻撃は実に悔りがたい。

数に任せた、まさに決死の猛攻だった。

さしもの亜衣もついに組み敷かれてしまった。

邪鬼どもは喜色満面、一斉に亜衣に群がった。

両腕は頭の上で固定され、美しい双乳が無防備に突き出される。

邪鬼どもはプルンと揺れる神の果実にかぶりついた。

「イーッヒッヒッヒー！イイ乳シテヤガルゼー！」

「オレハ前二モ、味ワッタコトガアルー！ヒヤアアア、ヨノ味ダアアア！」

これ程の幸福があるだろうか。

渾身の欲望のままに亜衣の乳房を揉みしだき、吸い上げ、舐め回した。

暴れていた足もついに割り開かれ、露わになった秘部に邪鬼が殺到した。

梅の護符はすでにない。

邪鬼の長い舌は亜衣のピンクの花びら、そこに息づく女芯、下に回って

アナルまでを舐めほぐした。

これ程の屈辱はないであろう。邪鬼如きにはいい様にされている。

顔も、脇も、胸も、お腹も、アソコも、足の指も、とにかく身体中に舌が

這い回っている。

「くっ……こんな奴らに！」

身体の間々まで邪鬼のよだれにまみれてゆく。

しかし、自分でも抵抗が弱まっているのが分かる。

体力的な問題ではない。

ただ身体の奥にわずかな変化がある。

「こんな、汚らしい奴らなのに！」

鬼獣淫界に屈して以降、亜衣は数多くの男たちに犯されてきた。

何度も何度も。身体が覚えてしまったのかもしれない。

「違う！違う！……こんなの！私は……！」

「ケエーッケッケッ……コノ女ア、濡レテキヤガッタゼエエエエ！」



ふぐ

くうあー！

魔改造され、母乳が出るようになった亜衣の乳房が揺れる。

前後から屈強の鬼たちに挟まれて、膣とアナルを猛烈なピストン運動で責められる。

「もっ……もう許してえええー！ああああーっ！」

母乳を吹き出し、膣とアナルから逆流した精液を噴き散らし、同時に失禁しながら、亜衣はイッた。限界まで反り返って、一際高い悲鳴をあげる。よだれ、鼻水、涙、汗、愛液、尿、腸液、屁も含めおよそ排出できるものは全て撒き散らしながら、亜衣はイキ狂った。

快楽の極み。

人生観を変えるようなセックスが亜衣に刻み込まれるのだった。



■あとがき

この度はつたないSTUDIOWALTZ本をお買い上げ頂き誠にありがとうございます。

淫獣聖戦既刊本の電子化もこのDL7でようやく3作品目となりました。

次はどうしよう……。淫獣聖戦の新刊か、バルテュスのティアか、ブラック・エンジェルのジュディか、鬼滅の胡蝶しのぶか、……。あまりにもDL7が終わったばかりすぎて、まだ何にも決まっておられません。

長く続くコロナ禍で医療従事者の皆さんはじめ本当に大変な思いをされている方が多いと思います。一日も早い日常の回復を祈っております。はやく普通に同人誌即売会が開催される世の中になりますように……。 (=人=)

さて今回は妄想虜囚さんに文章をお手伝い頂きました。邪鬼が垂衣に群がってるシーンです。ありがとうございました！

それでは、またねー！

(≥▽≤)/

発行：STUDIO WALTZ

MAIL：studiowaltz@yahoo.co.jp

発行日：2019/12/31(丸正インキ有限会社様)

電子化：2021/06



イラスト集(文章・セリフなし)











































